

第149回 鶴見大学図書館貴重書展

# つな がる 世界

古地図の中の日本

平成30年7月12日(木)～8月25日(土)

\*日曜・祝日閉館 8月中の土曜および8月11日・19日は閉館

〔会場〕 鶴見大学図書館 1階エントランス

〔時間〕 7月・平日：8時50分～21時00分 土曜：8時50分～18時00分

8月・平日：8時50分～18時00分

※但し、8月25日はオープンキャンパスのため展示のみ催行(10時00分～16時00分)

## 第 149 回 鶴見大学図書館貴重書展

### 「つながる世界 ―古地図の中の日本―

#### ごあいさつ

鶴見大学図書館が所蔵する西洋および日本の古地図から、日本の姿を描いた 15 点を展示いたします。

マルコ・ポーロによって「黄金の国」と紹介されて以来、遠くヨーロッパで製作された地図の上には幾度となく日本が描かれてきました。しかし、商人や宣教師から得られたわずかな情報と想像を交えて製作された日本図は、本来の姿とはほど遠いものでした。

一方、日本国内では奈良時代の高僧行基が作ったとされる日本図が長らく用いられていました。その行基図をもとに作られたテイセラの「日本図」がオルテリウスの『地球の舞台』に掲載され、ヨーロッパにおける日本図は新たな段階に入ることになりました。

鎖国時代の日本からも出島を通じて情報は伝わり、ヨーロッパでは流宣図を模倣した日本図が盛んに作られます。同時に日本へも海外の地図がもたらされ、日本の人々は世界の姿を知り、世界の中の日本を認識し始めるようになります。

今回の展示を通して、地図を介した日本と世界とのつながりを楽しんでいただけたら幸いです。

ドキュメンテーション学科 伊倉史人

#### 展示リスト

- 1 ボルドーネ「日本図」 木版・1528年・『世界島輿誌』所掲・ヴェニス
- 2 ミュンスター「世界図」 木版・1544年・『世界誌』所掲・バーゼル
- 3 ミュンスター「新世界図」 木版・1552年・『世界誌』所掲・バーゼル
- 4 オルテリウス「韃靼図」 銅版筆彩・1570年・『地球の舞台』所掲・アントワープ
- 5 オルテリウス「東インド図」 銅版筆彩・1570年・『地球の舞台』所掲・アントワープ
- 6 行基図（大日本国図） 江戸時代前期・京 風月宗智刊・洞院公賢編『新版 拾芥抄』所掲
- 7 テイセラ「日本図」 銅版筆彩・1595年・『地球の舞台』所掲・アントワープ
- 8 ホンディウス「アジア図」 銅版筆彩・1632年・『新地図帖』所掲・アムステルダム
- 9 流宣日本図（『本朝図鑑綱目』） 貞享5（1687）年・江戸 相模屋太兵衛刊
- 10 ショイヒツァー「日本図」 銅版・1728年・ケンペル『日本誌』第2版・ロンドン
- 11 シャトラン「日本帝国図」 銅版筆彩・1719年・『歴史地図帖』所掲・アムステルダム
- 12 ザッタ「世界図」 銅版筆彩・1757-1783年・『地図帖』所掲・ヴェニス
- 13 西川如見「地球万国一覧之図」 宝永5年（1708）年・京 梅村弥右衛門等刊・『増補 華夷通商考』所掲
- 14 長久保赤水『地球万国山海輿地全図説』 天保15（1844）年・水戸刊
- 15 橋本直政『啁蘭新訳地球全図』 寛政8（1796）年・大坂 岡田新次郎、浅野弥兵衛等刊

### 1 ボルドーネ「日本図」 木版・1528年・『世界島輿誌』所掲・ヴェニス・8.4 × 14.5cm

ヴェニスの地図製作者ベネデット・ボルドーネ (Benedetto Bordone・1469-1531) による日本図。ポルトガル船が種子島に漂着する以前の1528年に刊行された『世界島輿誌 ("Isolario")』に載る。日本単独で画かれた図としては、西洋で最初のもの。マルコ・ポーロ (1253-1324・ヴェネチアの商人・元のクビライに17年間仕える) が『東方見聞録』で日本を黄金の国ジパングとして紹介して以来、憧憬の的となった日本を想像で画く。京都あたりと思われるところに、大きな城を描き、「ciampagu (チアパグ = ジパング)」と記している。

### 2 ミュンスター「世界図」 木版・1544年・『世界誌』所掲・バーゼル・26.3 × 37.9cm

スイス、バーゼル生まれのドイツ人地理学者セバスチャン・ミュンスター (Sebastian Münster・1489-1552) による世界図。ミュンスターが刊行した地図帳『世界誌 ("Cosmographia")』の1544年版に掲載。「Zipangri (ジパングリ)」はアメリカ大陸の近くに、南北に細長い島として描かれている。右に「Temi Stitan」と見えるのは、メキシコ地方の当時の呼び方。海を大航海時代の大型帆船が駆け、想像上の海獣が海路に待ち受ける。四方八方から世界に風を吹き送るのは、ローマ神話の風の神 (ウエンティ) たち。

### 3 ミュンスター「新世界図」 木版・1552年・『世界誌』所掲・バーゼル・25.5 × 33.9cm

セバスチャン・ミュンスターによる "新世界" = 南北アメリカ大陸の図。『世界誌 ("Cosmographia")』1552年版に掲載。当時の太平洋 (Mare pacificum) は今よりも小さく認識されていて、「Zipangri (ジパングリ)」も、2「世界図」と同様北米大陸西岸近くに位置する。日本周辺に多くの島々 («Archipelagus 7448 insularū» = «群島: 7448の島々») が描かれているのは、ジパングの海域には7448の島があると記す『東方見聞録』による。日本の下に描かれる大型の帆船はマゼラン (1480-1521) 一行のうち唯一地球一周を果たしたヴィクトリア号か。右端に見える旗はマゼランの母国ポルトガルの国旗。

### 4 オルテリウス「<sup>だったん</sup>鞆図」

銅版筆彩・1570年・『地球の舞台』所掲・アントワープ・34.8 × 46.9cm

フランドル人の地図製作者アブラハム・オルテリウス (Abraham Ortelius・1527-1598) による「鞆図」 (Tartariae sive Magni Chami Regni typos: タルタリアまたは大汗国図)。『地球の舞台 ("Theatrum Orbis Terrarum")』の1570年版に掲載。黒海・カスピ海以東、鞆 (タルタリア) を中心に中央アジア、中国および北東アジアを描き、アニアン海峡 (Stretto di Anian・仮説の海峡・ベーリング海峡は1728年にロシア人ヴィトゥス・ベーリングによる発見) を挟んで東は北米大陸の一部までを描く。日本は本州 (坂東 <BAN DVMIA>) 以北は異様に小さい) 四国、九州、形も不正確。地名は西を中心に都 (Meaco)、大阪 (Osquo)、豊後 (BVNGO)、土佐 (TONSA) 等が見られるが、鹿児島 (Cogazuma) は九州から離れた島になっている。また日本への中継点としてか、琉球諸島が細かに描かれる。ヨーロッパでは、13世紀に西征したモンゴル軍をギリシア神話のタルタロス (冥界の深奥部にある、神に背いた罪人が落ちる地獄) から来た者たちと見なしたが、日本図下に記された注には、そのモンゴルが日本への侵攻には失敗したと記されている。なお、天正遣欧使節は、1590年の帰朝の際に、何年の版かは不明ではあるが『地球の舞台』を日本に持ち帰っている。

## 《日本図下の注》

Japan insula, à M. Paulo Veneto zipangri dicta, olim Chrÿse, a Magno Cham olim bello petita sed frustra.

= The isle of Japan, called Zipangri by Marco Polo of Venice, once Chryse, once attacked by the great Khan in war, but without success.

= 日本島。ヴェニス<sup>の</sup>マルコ・ポーロによりジパングリと呼ばれた。かつてはクリュセ（黄金島）と呼ばれた。大汗国（モンゴル帝国）との戦争で攻撃されたが、失敗に終わった。

## 5 オルテリウス「東インド図」

銅版筆彩・1570年・『地球の舞台』所掲・アントワープ・34.6 × 49.6cm

オルテリウスによる「東インド図」。『地球の舞台』1570年版に掲載。インド、東南アジア、中国、日本を描くが、朝鮮半島はない。日本は円形に近い一つの島で、南北に島々が列なる（メルカトルの日本図に拠る）。鹿児島（Cangoxina）、大隅（Osomi）、山口（Amaguco）等の九州の地名が多く記される一方で、京都（Miaco）が坂東（Bandu）より北にあり、土佐（Torza）も北方の島の一つとして描く。

## 6 行基<sup>ぎょうき</sup>図（大日本国図）

江戸時代前期・京風月宗智刊・洞院公賢編『新版拾芥抄』所掲・26.6 × 19.4cm

灌漑・架橋・貧民救済等、社会事業を成し遂げ、東大寺の大仏造営の勤進を行ったことでも知られる奈良時代の高僧行基<sup>ぎょうき</sup>（668-749）が作成したと言い伝えられる日本図。江戸時代初期に至るまで、ほぼ唯一の日本図。嘉元三年（1305）に写された仁和寺蔵本（西日本を欠く）や、鎌倉時代末写の金沢文庫本（東日本を欠く）が古いものとして知られるが、今年6月に14世紀（室町時代初期）成立の「日本扶桑国の図」（広島県立歴史博物館・福山市出身の古地図収集家守屋寿氏寄託）が完全な形で発見され話題となった。展示の行基図は『拾芥抄』（南北朝期の公家洞院公賢〈1291-1364〉による百科事典・原型は鎌倉時代中期成立）所収のもの。丸み帯びた形の諸国を繋ぎ合わせるようにして日本全体を象り、山城国より七道諸国へ向かう道線が描かれる。左上の注に、日本の国土の形は「独鈷<sup>とっこ</sup>の頭」（両端が尖った金属製の短い棒状の密教の仏具）や「宝の形」（不明）に似ていて、それ故に仏法が盛んとなり、金・銀・銅・鉄等の鉱山資源や五穀に富んで豊かであると説明する。フィレンツェ国立公文書館に所蔵される行基図は、天正遣欧少年使節がフランチェスコ1世・デ・メディチ（Francesco I de' Medici・1541-1587・トスカーナ大公）に贈ったものであるという説がある。

## 《日本図左上の注》

大日本國圖、行基菩薩所圖也、此土形如独鈷頭、仍佛法滋盛也、其形宝形、故有金銀銅鐵等珍宝、五穀豊稔也

= 大日本国図、行基菩薩の図する所也なり。此の土の形は独鈷頭の如し。仍て仏法滋盛也。其形、宝の形。故に金・銀・銅・鉄等の珍宝有りて、五穀豊稔也。

## 7 テイセラ「日本図」

銅版筆彩・1595年・『地球の舞台』所掲・アントワープ・25.4 × 48.2cm

ポルトガルのイエズス会士でスペイン王室の地図製作者、ルイス・テイセラ（Luis Teixeira・1564-1604）による日本図。オルテリウスのもとに送られ、『地球の舞台』1595年版に掲載される。原図は行基図。形の整っ

た日本図としては西洋ではじめてのもので、以後西洋で描かれる日本図に大きな影響を与えた。日本の位置は経度で4度程の誤差しかなく、東西の幅もほぼ正しく表されている。farima（播磨）、Vigo（備後）等の国名の他、都市名も記されるが、そのほとんどが布教活動の中心となった九州に見られる。地図の裏面（地図帳の次ページ）には「日本島（Iapona Insvla）」の詳細な説明を載せる（⇒ p12 に抜粋を掲載）。

## 8 ホンディウス「アジア図」

銅版筆彩・1632年・『新地図帖』所掲・アムステルダム・40.8 × 55.2cm

オランダ人の地図・地球儀製作者ヨドクス・ホンディウス（Jodocus Hondius・1563-1612）によるアジア図。『新地図帖』に掲載。『新地図帖』は、メルカトル図法で知られるゲラルドゥス・メルカトル（Gerardus Mercator・1512-1594）の地図帖「アトラス」の原板を購入したホンディウスが、自身の作品等を足して刊行した増補版。日本（Iapan）の形は、テイセラ型。上部にはエルサレム、ダマスカス等のアジアの都市を描き、左右にはアラブ人、アルメニア人、タタール人、中国人等の男女が民族衣装を着た姿で描かれている。

## 9 <sup>リゅうせん</sup>流宣日本図（『本朝図鑑綱目』）

貞享5（1687）年・江戸相模屋太兵衛刊・59.4 × 131.8cm

貞享・元禄・宝永頃（1688-1711）に活躍した浮世絵師、石川<sup>ともぶ</sup>流宣（生没年未詳）による日本図。波打つような海岸線と彩色の美しさが特徴的。地図としての正確さより、絵画的な要素が強く、富士山をはじめとする名山、江戸、名古屋、熊本等の諸城、海路行き交う船（中国船も見える）等が画かれる。また、交通路に詳しい他、武鑑のように諸藩藩主名と石高が記載される等実的な面がある一方、行基図にも見られる羅列国（羅刹国：羅刹〈鬼神〉女500人の住む島。女護国とも）や韓唐（雁道：雁の故郷である極北にある国）といった伝説の島も画かれている。流宣図には本図より大型、詳細な『日本海山潮陸圖』（1691）『日本山海図道大全』（1703）等がある。元禄3年（1690）から3年間、出島でオランダ商館付きの医師として日本に滞在したドイツ人、エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kaempfer・1651-1716）が持ち帰った書籍や地図の中に本図も含まれている。

## 10 ショイヒツァー「日本図」

銅版・1728年・ケンペル『日本誌』第2版・ロンドン・46.5 × 53.0cm

スイス人の医師であり博物学者のヨハン・カスパー・ショイヒツァー（Johann Caspar Scheuchzer・1702-1729）による日本図。博物学分野の収集家ハンス・スローン（Sir Hans Sloane・1660-1753）が入手したケンペルの未完の遺稿『日本誌』をショイヒツァーが編集、英訳して刊行。本図はケンペルが描いた図（現大英博物館蔵・原図は延宝六年〈1678〉『新撰大日本図鑑』）をもとにショイヒツァーが9『本朝図鑑綱目』等を参照して新たに作成したもの。左上にはカムチャッカの図、下部には恵比寿、大黒天等七福神が描かれる。

## 11 シャトラン「日本帝国図」

銅版筆彩・1719年・『歴史地図帖』所掲・アムステルダム・48.0 × 57.2cm

アンリ・アブラハム・シャトラン（Henri Abraham Chatelain・1684-1743）による日本図。『歴史地図帖（"Atlas historique"）』第5巻に掲載される。流宣の日本図は海外へ流出し、模刻版が刊行されることになるが、本

図は 1715 年に刊行されたハドリアン・レランド (Adrien Reland・1676-1718) による模刻版「日本帝国図 (Imperivm Japonicvm)」をさらに写したもの (但し、『本朝図鑑綱目』ではなく、同じ流宣の 1691 年刊『日本海山潮陸図』による)。国名は見事な漢字で表記され、ローマ字が添えられている。右下は長崎の拡大図。下部中央のカルトーシュ (飾り枠) には葵の御紋の他、大名の家紋らしきものが配される。

## 12 ザッタ「世界図」銅版筆彩・1757-1783 年・『地図帖』所掲・ヴェニス・28.5 × 39.5cm

ヴェニスの地図製作者アントニオ・ザッタ (Antonio Zatta・1757-1797) による世界図。『地図帖 (Atlante novissimo)』に掲載。世界周航を遂げたジェームズ・クック (1728-1779) とルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィル (1729-1811) の航路が示される、科学的航海の時代の世界図。日本は、その形は不正確ではあるものの、蝦夷 (Ieso) が描かれている。四角には四大陸 (ヨーロッパ〈右上〉・アフリカ〈右下〉・アジア〈左上〉・アメリカ〈左下〉) のアレゴリー (寓意像) を描く。

## 13 西川如見「地球万国一覽之図」

宝永 5 年 (1708) 年・京 梅村弥右衛門等刊・『増補 華夷通商考』所掲・22.3 × 39.5cm

長崎生まれの天文・地理学者・通詞、西川如見 (1648-1724) による世界図。中国 (華) と諸外国 (夷) の地理、産物、風俗等を記した地誌『華夷通商考』に掲載。本図は、イエズス会の宣教師マテオ・リッチ (Matteo Ricci・利瑪竇・1552-1610) が明末の万暦 30 年 (1602) に刊行した『坤輿萬国全圖』 (あるいは、明の王圻 (おうきん) 〈1529-1621〉の『三才圖會』所収) の世界図を下敷きにしている。ヨーロッパで製作された地図と異なり、中華世界を中心にして描かれている。南米大陸に「長人国」「食人国」等が見えるが、これは大航海時代の報告による想像の産物 (8「新世界図」にも「Canibali (食人国)」が描かれる)。

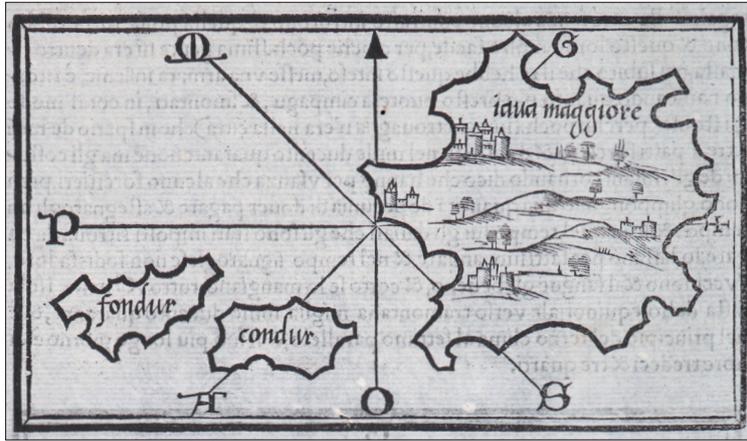
## 14 長久保赤水『地球万国山海輿地全図説』 天保 15 (1844) 年・水戸刊・33.7 × 89.7cm

長久保赤水 (1717-1801) は江戸時代中期の漢学者、地理学者。水戸藩士で和算家の小池桃洞に地図製作に必須の天文学を学ぶ。日本ではじめて経度・緯度の入った日本図『日本輿地路程全図』を製作したことで知られる。本図は 12 同様、マテオ・リッチ系の世界図だが、享保 5 年 (1720) 原目貞清 (生没年、伝未詳) 「輿地図」が原図で、独自に千島列島等を加えたものと言われる (明治大学図書館芦田文庫に赤水の書入がある「輿地図」が収蔵されている)。

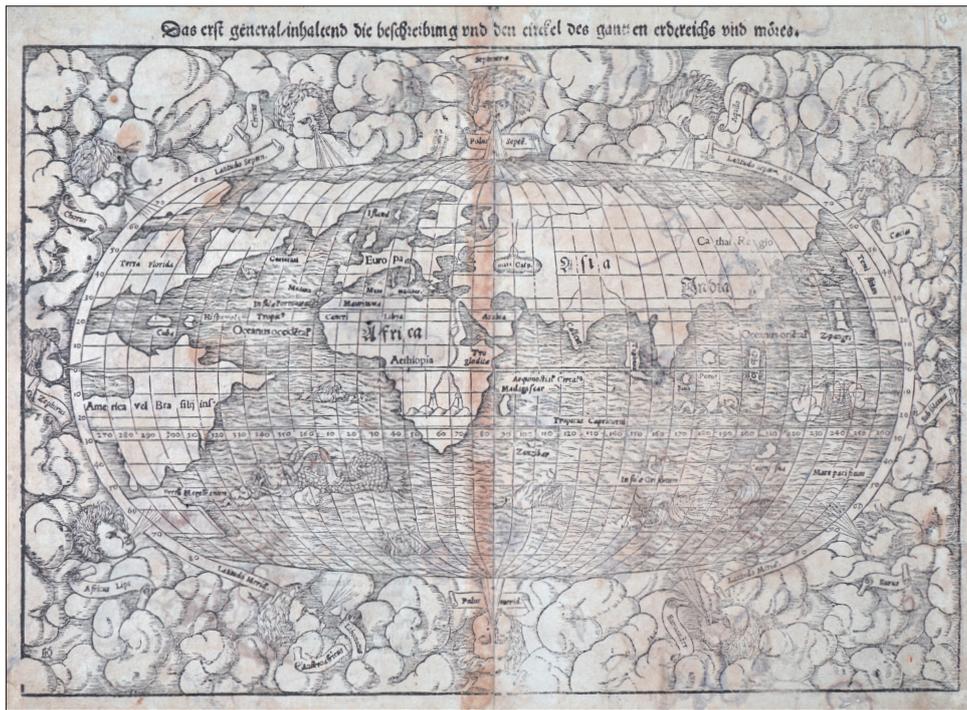
## 15 橋本直政『<sup>オランダ</sup> 啁蘭新訳地球全図』

寛政 8 (1796) 年・大坂 岡田新次郎、浅野弥兵衛等刊・94.7 × 56.7cm

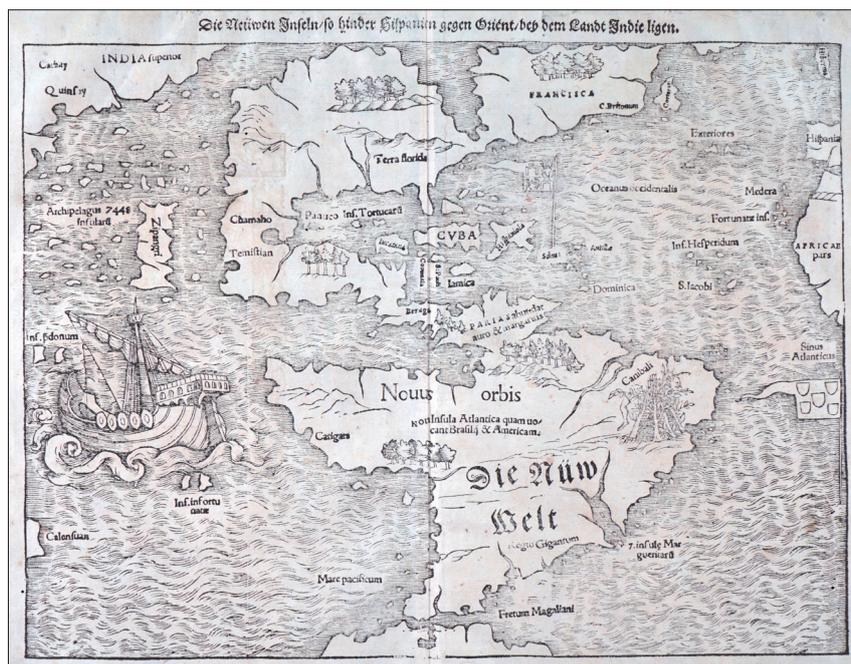
「啁蘭」は「オランダ」と読む。橋本直政 (1763-1836) は大槻玄沢門の蘭学者。東西の両半球図。原図は不明。オランダの地図製作者、ヨアン・ブラウ (Joan Blaeu・1598-1673) の世界図の系統か。カリフォルニア半島は島に、オーストラリアの東岸はあいまいに描かれている。地図のまわりをうめる地球の解説や世界の地理の説明は、序者「曾之唯應聖」 (曾谷学川・1738-1797・篆刻家・『豆腐百珍』の著者) によるものか。



1 ボルドーネ「日本図」 木版・1528年・『世界島輿誌』所掲・ヴェニス・8.4 × 14.5cm



2 ミュンスター「世界図」 木版・1544年・『世界誌』所掲・バーゼル・26.3 × 37.9cm



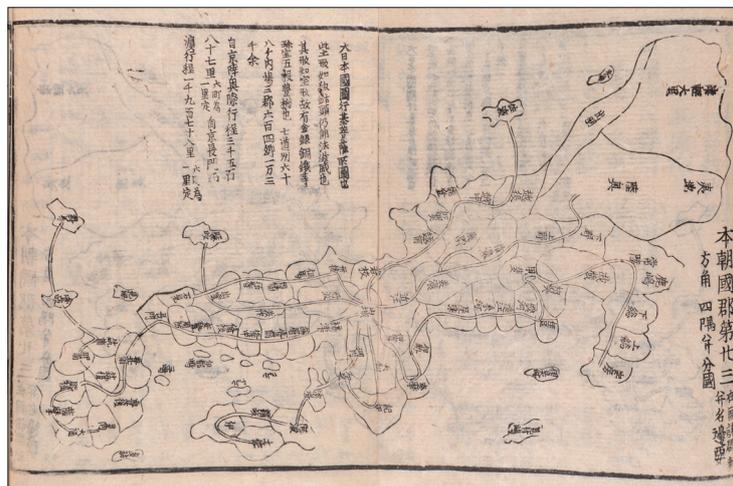
3 ミュンスター「新世界図」 木版・1552年・『世界誌』所掲・バーゼル・25.5 × 33.9cm



4 オルテリウス「韃靼図」 銅版筆彩・1570年・『地球の舞台』所掲・アントワープ・34.8×46.9cm



5 オルテリウス「東インド図」 銅版筆彩・1570年・『地球の舞台』所掲・アントワープ・34.6×49.6cm



6 行基図（大日本国図） 江戸前期・京風月宗智刊・洞院公賢編『新版 拾芥抄』所掲・26.6×19.4cm



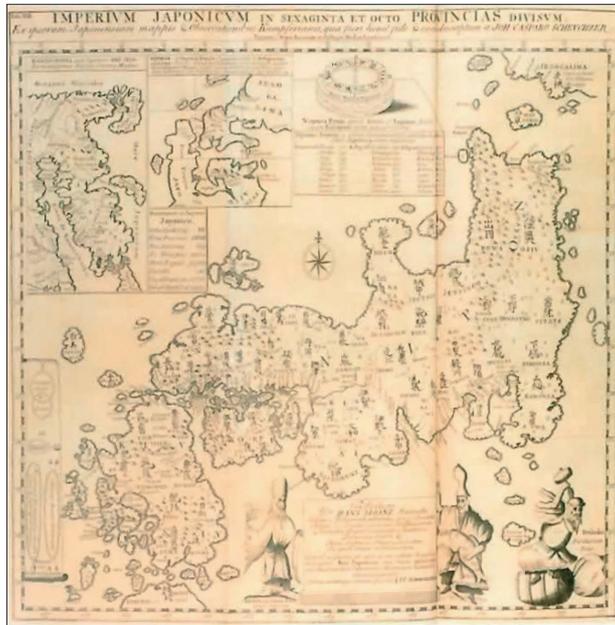
7 テイセラ「日本図」 銅版筆彩・1595年・『地球の舞台』所掲・アントワープ・25.4×48.2cm



8 ホンディウス「アジア図」 銅版筆彩・1632年・『新地図帖』所掲・アムステルダム・40.8×55.2cm



9 流宣日本図（『本朝図鑑綱目』） 貞享5（1687）年・江戸相模屋太兵衛刊・59.4×131.8cm



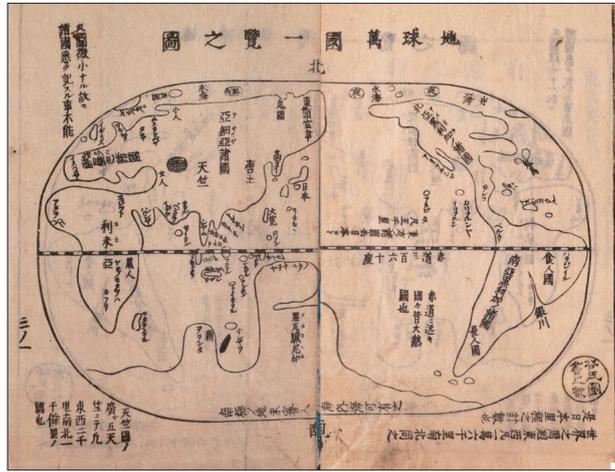
10 ショイヒツアー「日本図」 銅版・1728年・ケンペル『日本誌』第2版・ロンドン・46.5×53.0cm



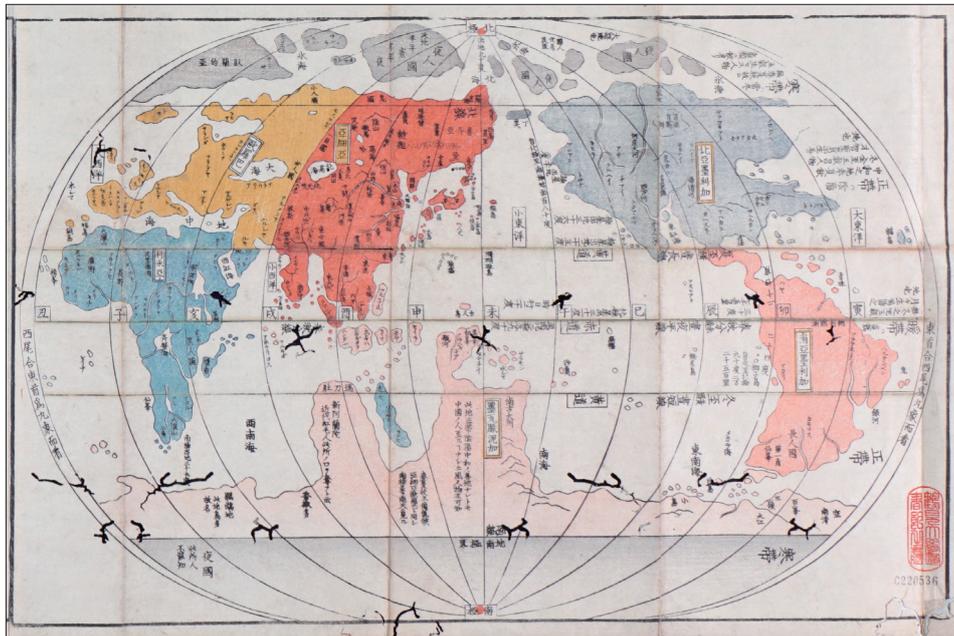
11 シャトラン「日本帝国図」 銅版筆彩・1719年・『歴史地図帖』所掲・アムステルダム・48.0×57.2cm



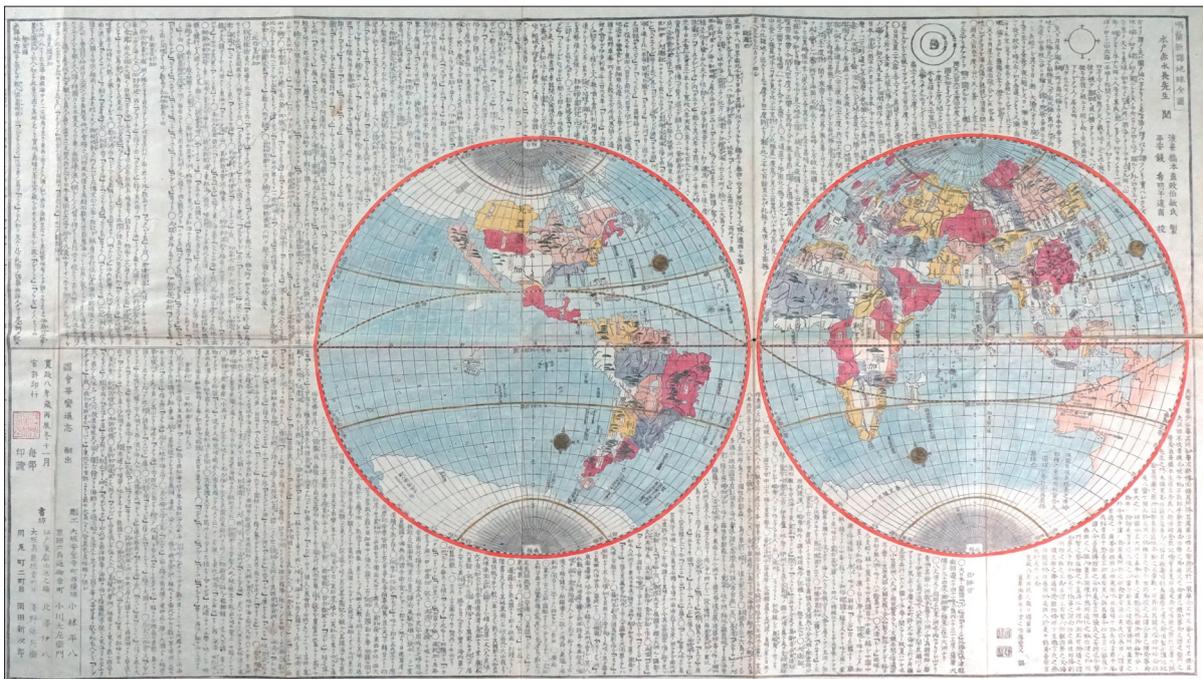
12 ザッタ「世界図」 銅版筆彩・1757-1783年・『地図帖』・ヴェニス・28.5×39.5cm



13 西川如見「地球万国一覽之圖」 宝永5年(1708)年・京梅村弥右衛門等刊・『増補華夷通商考』所掲・22.3×39.5cm



14 長久保赤水『地球万国山海輿地全図説』 天保15(1844)年・水戸刊・33.7×89.7cm



15 橋本直政『荷蘭新訳地球全図』 寛政8(1796)年・大坂岡田新次郎、浅野弥兵衛等刊・94.7×56.7cm

## 7 テイセラ「日本図」：「日本島 (Iapona Insvla)」の説明 (参考文献①所掲翻訳より抜粋)

### 【日本の大きさ・位置】

- ・ヤポーナ (Iapania) は3つの島からなり (北海道は認識されていない)。首都はメアク (Meacu・都=京都) で66の国からなる。
- ・北緯30～38度に位置し、長さは200レウカ (=約1000km)、幅10～30レウカ (=50km～150km) (1 leucaは5～6km。実際の日本は全長約3500km (含北海道)、幅は広い所で300km。北緯34度、東経134度 (明石市) に位置する)。
- ・ノヴァイスパニア (現在のメキシコ) から150レウカ (=約750km) のところにある (実際の距離は約11,000km)。

### 【気候・自然・食物】

- ・雪が多く寒冷ではあるが、それほど厳しい寒さではない。水は良好。山が多く、高く険しい。富士山 (Fugenojama) は有名で、頂が雲の上から出る程の高さだ。温泉が多く、医療用としても用いられる。
- ・植物は観賞用、採果用、西欧のものとは変わらない。桧がいたる所に生えていて、大きな船のマストを作れる程、高く太い。
- ・9月に米、5月に麦を収穫する。麦はパンを作るのではなく、ダンゴを作る。野原に牛や馬 (軍馬)、山に狼、兎、ヤギ、鹿がいる。鳥は、雉、アヒル、山鳩、鶉、長尾鶏などがある。羊、豚、鶏、七面鳥などは飼育せず、肉を食べるとすれば野鳥を食べる。魚は、マス、ニシンが多い。バターやオリーブオイルは用いず、岸に打ち上げられた大魚から作った油を用いる。松明や靱殻を燃やして照明とする。

### 【生活】

- ・首長は長身で尊厳がある。人びとはおおむね活動的で60歳まで軍務に堪える。鬚は多くも少なくもなく、頭髪は様々である。
- ・子ども、平民、農民は頭半分を刈り、貴人はほぼ全部を刈る。後頭部に少しだけ残して、それに触れられることを侮辱とする。
- ・飢渴、暑熱、寒冷、不眠、労役などの苦しみには驚くべき忍耐力がある。真冬でも暁に起き、真っ先に河で水浴びをする。
- ・乳から離れると遠くの土地に移され、狩猟を学ばせる。軟弱な微温的教育は精神を害すると考えているからである。
- ・布団を敷いて、木や石を枕にする。
- ・中国人と同様清潔に気を配る。中国人と同様、食事には2本の小さい木を使って、何一つこぼさず上手に食べる。
- ・富裕層の食事は一つ一つ椀にもられ、桧や松の膳で運ばれる。靴で敷き物を汚さないよう、食堂へは履き物を脱いで入る。
- ・食事はピラミッドのように盛られ、金粉が撒かれ、糸杉で飾られている。ワインはなく、米を搾った酒を飲む。
- ・茶の粉を熱湯に入れたものを愛飲する。身分の高い人は友人のために自ら茶を調合する。茶を飲むための建物がある。中には小型のストーブがあり、その上に鉄製の薬缶が懸けられている。客人が来た時、帰る時に少量の茶を供す。茶道具を宝物のようにし、客人に見せる。
- ・地震が多いが、家は木造である。基礎を石で作った家もあり、技術的にも一見の価値がある。

### 【言語】

- ・言語は万人共通。貴人と庶民、男と女の間では話す言葉が変わる。話し言葉と書き言葉も異なる。書き言葉も、書翰と書物では書き方が異なる。古言な詩句を用いて書いた多くの文献がある。一つの文字 (漢字) でも複数の意味がある場合がある。
- ・日本語は多様性と豊富さにおいて、ラテン語に勝っていて、完全に習得するには多大の努力と長い時間が必要だ。

### 【国民・宗教】

- ・第1階級は軍隊の将となり、財産を所有するもので、トノ (殿) と呼ばれる。第2階級は祭祀を司る者たちで、坊主と呼ぶ。第3階級は残りの貴人と市民、商人、職人、製造者がいる。第4階級は農民である。
- ・全体として鋭敏、賢明である。貧乏はなんら恥じるべきことではなく、不名誉とも考えられていない。
- ・悪口、盗み、神を冒瀆する言葉を吐くこと、博奕を忌避する。罪人に対する刑罰は厳しく、追放、財産没収、斬首より軽いものはない。
- ・逮捕された盗み人は恥辱を与えるために、車に乗せて市中を引き回し、磔にする。
- ・宗教はアミダ (阿弥陀) とシャカ (釈迦) を崇める。健康、子ども、金銭に関する寛大な施与者をカミ (神) と呼ぶ。

### 【参考文献およびウェブサイト】

- ①松本賢一『欧洲古版日本地図集』(十一組出版部・1943) ②『西洋人の描いた日本地図 ―ジパングからシーボルトまで』(展示図録・社団法人 OAG・ドイツ東洋文化研究会編・1993) ③『西洋古版日本地図』(鶴見大学図書館 特定テーマ別目録集成 II・1997) ④『世界のかたち日本のかたち ―渡辺紳一郎古地図コレクションを中心に: 開館 30 周年記念特別展』(展示図録・神奈川県立歴史博物館編・1997) ⑤織田武雄著『古地図の博物誌』(古今書院・1998) ⑥三好唯義『図説世界古地図コレクション』(河出書房新社・1999) ⑦『蘆田文庫特別展: 明治大学図書館所蔵古地図コレクション』(蘆田文庫特別展実行委員会編・明治大学図書館・2004) ⑧三好唯義・小野田一幸『図説日本古地図コレクション』(河出書房新社・2004) ⑨ Jason C. Hubbard『Japonia insulae: the mapping of Japan: historical introduction and cartobibliography of European printed maps of Japan to 1800』(Houten: Hes & de Graaf Publishers・2012) ⑩『横浜市立大学コレクション・古地図の世界 ―地球のかたちと万国の大地: 横浜市歴史博物館企画展』(横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団編・2013) ⑪海田俊一『流宣図と赤水図―江戸時代のベストセラー日本地図―』(三恵社・2017) ⑫ Cartographica Neerlandica (<http://www.orteliusmaps.com/index.html>) ⑬国土地理院「古地図コレクション」(<https://kochizu.gsi.go.jp/about>) ⑭神崎順一「古き日本地図を読む ショイヒツァー「日本図」」(雄松堂書店ネットマガジン Net Pinus vol.85・2014・[http://myrp.maruzen.co.jp/timewithbook/pinus\\_85\\_1-1/](http://myrp.maruzen.co.jp/timewithbook/pinus_85_1-1/))